

場所句倒置構文の派生と構造

宮元創

1. 概要

本発表は、英語の場所句倒置構文 (Locative Inversion: LI) が非対格動詞と受動態に限られる軽場所句倒置構文 (Light Locative Inversion: LLI) と非能格動詞や一部の他動詞を用いる重場所句倒置構文 (Heavy Locative Inversion: HLI) の2種類に分けられるという Culicover and Levine (2001) の分析を援用し、Chomsky (2013, 2015) の Labeling Algorithm (LA) で LI の2種類の派生と構造を提案する。

2. LI の特性

まず、英語の LI の特性を示す。英語の LI では、動詞が前置の場所句ではなく後置の名詞句と数一致するという特性、さらに、場所句が主語的特性と話題化の特性を持つことが先行研究で示されている (Bresnan (1994), Nishihara (1999))。

Culicover and Levine (2001) は (1), (2) の動詞付加の副詞、(3), (4) の数量詞遊離において LLI と HLI の差異があることを示している。

- (1) a. Into the room walked Robin carefully.
b. *Into the room walked carefully Robin.

- (2) a. *In the room slept Robin fitfully.

- b. In the room slept fitfully the students in the class who had heard about the social psych experiment that we were about to perpetrate.

(Culicover and Levine (2001: 292-293))

- (3) *Into the mists of history are both quickly disappearing my heroes.

- (4) From this pulpit have both preached Cotton Mather's two closest and most trusted associates.

(Culicover and Levine (2001: 301))

(1), (2) は、LLI では後置の名詞句が動詞に付加する副詞に先行しなければならないが、HLI では後置の名詞句が動詞付加の副詞に先行できない重名詞句であることを示している。さらに、(3), (4) は、LLI は動詞句内に数量詞 both が遊離することを許さないが、HLI は数量詞遊離を許すことを示している。

上記の差異より、LLI の後置の名詞句は動詞句内に留まるのに対し、HLI の後置の名詞句は v*P 指定部から上位に移動していると想定される。

3. 主張と分析

3.1. ラベリング分析

本発表では、一致は全て probe-goal 関係で捉えられ、移動はラベルの解釈によって捉えられることを提案する。そしてこの提案によって LI の2種類の派生が説明可能であることを示す。

まず、本発表においてラベル付けがどのようになされるのかを示す。Chomsky (2015) は、英語の T は弱いため、一致素性の $\langle \phi_i, \phi_i \rangle$ によって強化されなければならないことを示している。本発表では、Chomsky (2015) のこの考えを敷衍して、(5) を提案する。(5) は、TP 指定部には T と共通の素性を持つ要素がなければならないことを示している。

- (5) 英語の T は共通の素性 $\langle F, F \rangle$ のラベルによって強化されなければならない。

3.2. AGREE

次に、本分析において一致がどのように捉えられるのかを示す。Chomsky (2008) 以降、フェイズ主要部の素性とその補部の主要部に継承されることが論じられてきた (Chomsky (2008, 2013, 2015, 2019))。Chomsky (2019) は、AGREE は素性を持つ phase 主要部が外的併合で導入され、T や R に素性継承される前に phase 主要部と外項間で適用されることを示している。本発表では、Chomsky (2019) の AGREE を援用し、以下の想定をする。(6) は一致が全て probe-goal 関係で捉えられ、その結果、長距離一致も可能であることを主張するものである。

- (6) AGREE は、unvalued 素性が派生に導入されてすぐに適用される。

3.3. LLI の派生

上記のラベリング分析と AGREE の枠組みで LLI は (7) が示す Tanigawa (2019) と同様の派生になると提案する。

(7) a. Into the room came John.

b. [ε C [_{Top}] [_{uPhi}] [δ Into the room [_{Top}] [γ T [β <R-v*> [α John [_{Phi}] [_{#Case}], into the room]]]]]]

c. [ε C [δ Into the room [_{Top}] [γ T [_{Top}] [_{uPhi}] [β <R-v*> [α John [_{Phi}] [_{#Case}], into the room]]]]]]

(α =D, β =<R-v*>, γ =T, δ =<Top, Top>, ε =C)

(7b, c) は (7a) の派生を表していて、bottom-up に派生される。(7b) において、LLI の派生は Hoekstra and Mulder (1990) が提案する場所句と名詞句が小節を構成することを想定する。さらに、Epstein, Kitahara, and Seely (2016) に従い、非対格動詞は R が v* に外的対併合することによって <R-v*> のアマルガムとして派生されると想定する。(7b) において C はフェイズ主要部であるため C が素性を持ち、LLI の派生では、C が [_{uPhi}] に加え、[_{Top}] 素性を持つと想定する。(6) に従い、AGREE は T に素性継承される前に適用され、C の [_{uPhi}] は名詞句 John が持つ [_{Phi}] と AGREE する。その後、素性は C から T に素性継承され、(7c) の派生となる。(7c) の派生に最小探索が適用され、ラベルを決定する際、(5) に従い T は <Top, Top> によって強化されるためラベルになることができ、(7c) のようにラベルが決定する。よって、転送の際に全てのラベルが決定しているため派生は収束する。(7) で提案する派生では、[_{uPhi}] が名詞句の [_{Phi}] と AGREE するため動詞が場所句ではなく、名詞句と数一致するという特性を捉えられ、さらに、場所句が TP 指定部を占め、[_{Top}] 素性を持つことによって、場所句が持つ主語的特性と話題化の特性を捉えることができる。

3.4. HLI の派生

HLI は (8) のように派生すると提案する。

(8) a. On the stage dances the girl who plays Joan of Arc in the school festival. (Koike (2013: 577))

b. [ζ C [_{Top}] [_{uPhi}] [ε PP [_{Top}] [δ T [γ DP [_{Phi}] [_{#Case}] [β [α dance] PP]]]]]]]

c. [η [ζ C [ε PP [_{Top}] [δ T [_{Top}] [_{uPhi}] [γ DP [β [α dance] PP]]]]]] DP] (α = β = γ =<R-v*>, δ =T, ε =<Top, Top>, ζ = η =C)

(8b, c) は (8a) の派生を表す。(8a) の動詞は非能格動詞であり、本発表では Hale and Keyser (1993) に従い、非能格動詞は他動詞とみなす。(8b) において、C はフェイズ主要部として派生に導入され、C は [_{Top}] と [_{uPhi}] を持つ。(6) に従い、C の [_{uPhi}] は、v*P 指定部の DP の [_{Phi}] と AGREE した後、T に素性継承される。(8c) において、DP は C の右方に内的対併合すると想定するが、DP の移動の前に AGREE は適用されているため、一致は正しく捉えられる。(5) により T が <Top, Top> によって強化されるため (8c) のようにラベルが決定する。全てのラベルが決定し、未指定素性も残っていないため派生は収束する。この派生において重要な点は LLI の派生とは異なり、HLI の主語は v*P 指定部に生起し、重名詞句倒置をしているということである。よって、本発表で提案した 2 種類の派生は 2 章で示した LLI と HLI の統語的特性の違いを説明できると主張する。

<参考文献> Bresnan, Joan (1994) “Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar,” *Language* 70, 72-131. Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA. Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49. Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extension,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam. Chomsky, Noam (2019) “Puzzles about Phases,” *Linguistic Variation: Structure and Interpretation*, ed. by Lodovico Franco and Paulo Lorusso, 163-168, Mouton de Gruyter, Berlin. Colicover, Peter W. and Robert D. Levine (2001) “Stylistic Inversion in English: A Reconsideration,” *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 283-310. Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2016) “Phase-Cancellation by Pair-Merge of Heads,” *The Linguistic Review* 33, 87-102. Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (1993) “On the Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations,” in K. Hale and S. Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvian Bromberger*, MIT Press, Cambridge, Mass., 53-109. Hoekstra, Teun and René Mulder (1990) “Unergatives as Copular Verbs,” *The Linguistic Review* 7, 1-79. Koike, Koji (2013) “Two Types of Locative Inversion Constructions in English,” *English Linguistics* 30 (2), 568-587. Nishihara, Toshiaki (1999) “On Locative Inversion and There-Construction,” *English Linguistics* 16, 381-404. Tanigawa, Shin-ichi (2019) “VP-Internal Subjects/Nominatives and the POP Framework” paper presented at The 3rd Joint Conference of Neo-Grammar Circle (NGC) and Fukuoka Linguistic Circle (FLC).